

音楽劇づくりの活動における言葉と音楽表現の連関について

著者	島川 香織
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	10
ページ	57-71
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000495/

音楽劇づくりの活動における言葉と音楽表現の連関について

A Relation between Words and Music Expression in the Activity of the Making of Music Drama

島川 香織*

Kaori SHIMAKAWA

抄 録

本研究は、保育士・幼稚園教諭をみざす学生を対象とした音楽劇づくりの活動における言葉と音楽表現の連関についての実践報告である。替え歌の歌詞の内容とそれらにふさわしい作品選択を通して、主人公の心境や日常、ストーリーの予見や主人公側に味方した第三者的表現、主人公に対峙するキャラクターへの恐ろしさと勝利感、物語のハッピーエンド等が音楽表現された。物語における一瞬の緊張感と場面転換、劇的な場面における演出効果が音表現を通して為された。

はじめに

幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成26年4月）、幼稚園教育要領（平成20年3月）には、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」が掲げられている。¹⁾ また保育所保育指針（平成20年3月）においても、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助としての「教育」の5領域を構成するもののうちに「言葉」「表現」が掲げられている。²⁾ 幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針では、経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う「言葉」³⁾ 感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする「表現」⁴⁾の枠組みが明示されている。

また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、内容として「言葉」の領域では「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像をする楽しさを味わう」、¹⁾ 「表現」の領域では「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」が掲げられ、内容の取扱いとしては「言葉」の領域では「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージを持ち、言葉に対する感覚

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

が養われるようにすること」、「表現」の領域では「乳幼児期における自己表現は素朴な形で行われることが多いので、保育教諭等はそのような表現を受容し、園児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、園児が生活の中で乳幼児期らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」と明記されている。⁵⁾

このように、①園児が絵本や物語を通して想像をする楽しさを味わい、自分の経験と結び付け想像を巡らせ楽しむことで、豊かなイメージを持ち、言葉に対する感覚が養われるように支援・指導すること、②園児が美しいものや心を動かす出来事に触れイメージを豊かにし、音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わい、自分のイメージを動きや演じて遊んだりするなどの楽しさを味わうことができるように、素朴な自己表現や意欲を保育者が受容し、乳幼児期らしい様々な表現を楽しめるように支援・指導することが大切であることがわかる。

本研究では、このような乳幼児への支援・指導の在り方をもとに授業構成された、保育士・幼稚園教諭を旨とする学生のための大学での授業における音楽劇づくりの実践報告を行う。

I 実践概要

本章では、音楽劇づくりの活動の実践概要を示す。

1. 実践概要

実践概要は以下の表1の通りである。

(表1)実践概要

L1	こども人形劇のお話の内容を理解し、グループでの役割を決める。
L2～L4	お話にふさわしい音楽劇を検討し、歌唱、身体表現、鍵盤楽器、打楽器を使って表現を工夫する。
L5	グループごとに作成した音楽劇を発表する。

※数字は授業回数を示す

2. 実践方法

(1) 実践方法

授業実践は、H.28年5月から6月にかけて、関西国際大学教育学部教育福祉学科・基幹科目「保育内容表現Ⅱ」3クラス(96名)の学生を対象とし、方法は、打楽器(大太鼓・小太鼓・鉄琴・木琴・小物楽器)、グランドピアノ1台、電子ピアノをひとり1台ずつ使用し行った。「保育内容表現Ⅱ」の授業は、「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」などの科目を履修し、ある程度鍵盤楽器演奏を経験した学生で、保育士・幼稚園教諭を旨とする学生のための音楽を通した内容表現の授業である。

今回の授業では、先ずこども人形劇場のDVD『みにくいあひるの子』『三匹のやぎのガラガラドン』⁶⁾を視聴し、1グループ7～8人のグループ編成を行ったうえ、自分たちのグループがどちらの

お話に音楽劇を創作するか話し合った。結果、すべてのグループが『三匹のやぎのガラガラドン』を選択した。

音楽劇づくりの具体的な活動に入る前に、限られた授業コマ数の中で音楽劇を創作するにあたり、教師が以下のグループシート(資料1)を各グループに配布し、事項の確認がなされた。

(資料1)の内容

☆音楽(劇)づくりは、公共の場で発表するのではなく、あくまで演習としての発表ですので、

ひとりが複数の役を担当します。

☆教育現場での音楽劇の発表での先生役とこども役の両方をします。

☆スケジュール(実際には具体的な日付を確認)

第1回目 ナレーション、セリフ、ピアノ、歌、リトミック、音表現の台本づくり

第2回目 音楽表現(ピアノ・歌・リトミック)+音表現の音楽づくり

第3回目 音楽表現(ピアノ・歌・リトミック)+音表現の練習

第4回目 リハーサル&練習

第5回目 発表(10分以内)

※グループメンバー表※ ※実際より縮小している

班長◎	副班長○	学 籍 番 号	氏 名

各グループごとに(資料1)の内容を確認・記述した後、お話にふさわしい音楽劇の検討に入り、お話を読み上げる語り手・登場人物・音楽表現の役割を話し合いで決定した。

語り手や登場人物役が読み上げるお話の内容は、本授業が音楽を通した内容表現の授業であることから、言葉の創作は行わず、すべてのグループが同じナレーションとセリフ⁷⁾を用いた。

次に、各グループで台本づくりに移行し、(資料2)の内容を確認したうえで、台本作成(資料3)を行った。歌・リトミック・ピアノは、それぞれ役割分担を決めたうえで同時に演奏され、セリフを変化させる替え歌を実施するグループには、替え歌の元歌となる楽譜集を2種類提示した。⁸⁾

音表現は、この保育内容表現授業の第1・2回目で実践した音楽劇づくりとは別単元のものと同様の内容で、自由な音による即興表現とし、ペットボトルのビー玉詰め等、手作り楽器を含めた教室内にある楽器を使用することとした。

(資料2) 台本づくりの内容

保育内容表現Ⅱ 音楽(劇)づくり・台本

月曜 or 水曜()限・()班 作品名()・No. ()

※台本作成について

- ・音楽劇の初め・途中・最後(計3回)に、音楽表現として、歌+リトミック+ピアノ(同時)を挿入する(曲は元曲の歌詞の替え歌又は作曲してもよい。替え歌用元曲については資料提供)
- ・音楽劇の途中に、音表現として、任意の楽器による即興表現を最低3回以上挿入(楽器選択は教室にあるもので自由)
- ・略記を使う ナレーション=㊦ セリフ=㊧ 歌=㊨ ピアノ=㊩ リトミック=㊪ 音表現=楽器名を書く

(資料3) 台本フォーマット(サンプル) ※実際より縮小している

ナレーション&セリフ	氏名	//	//	//	//	//	//
テーマソング	㊦	㊨	㊩	㊨	㊨	㊦	㊦

(2) 授業方法

授業方法としては、こども人形劇場のお話の内容を理解したうえで、お話にふさわしい音楽劇を創作するにあたり、先ず、あらすじすべてを台本に写し、語り手・登場人物・音楽表現(歌・リトミック・ピアノ)の役割を決定した。次に、音楽表現や音表現をあらすじのどこに挿入するかを決定し、その過程で、同時進行の形で、今回の実践では作曲する学生はいなかったため、音楽表現に使用する作品選択とその替え歌の歌詞づくりや、音表現に使用する楽器の選択と楽器担当を決定し、その都度台本に略記(資料3)を用いた形で記述した。

音楽表現(ピアノ・歌・リトミック)と音表現による音楽づくりのやり方を記述した台本作成が終了したグループから、音楽表現と音表現の練習→リハーサル練習へと進行し、最終的に第5回目の授業ですべてのグループが音楽劇を発表した。

またそれぞれの授業回で、グループ活動における個人の活動と振り返りの記録としてワークシートを提出した。

Ⅱ 音楽劇づくりにおける言葉と音楽表現の連関

ここでは、台本の記述が的確であったグループA・B・Cの記述した音楽劇づくりの台本におけるナレーション・セリフ及び音楽表現・音表現の順序構成(表2)を参照しながら、本文において、学生の台本に記されていた楽器名やその注意書きを引用したうえで、言葉と挿入された音楽表現・音表現との連関を分析する。

(表2) 音楽劇づくりの台本におけるナレーションとセリフ及び音楽表現・音表現の順序構成

ナレーションとセリフ	音楽表現・音表現の順序構成		
	グループA	グループB	グループC
<p>むかしむかし、あるところに、三匹のヤギがいました。</p> <p>一番小さいヤギは、ガラガラドンという名前でした。</p> <p>中くらいのヤギは、ガラガラドンという名前でした。</p> <p>とっても大きいヤギは、ガラガラドンという名前でした。</p> <p>三匹とも、ガラガラドンという名前だったのです。</p> <p>さてある日の事、三匹のガラガラドンは、山の向こうへ草を食べに行くことにしました。</p> <p>山の向こうの草はやわらかくておいしくて、食べたらきつと元気で丈夫(じょうぶ)になれるでしょう。</p> <p>三匹のガラガラドンが歩いていくと、途中に深い谷があつて橋がかかっていました。</p> <p>「小さい橋だなあ。三匹いっしょには渡れないや」</p> <p>そこで最初に小さいヤギのガラガラドンが、コトコト、コトコト、橋を渡りました。</p> <p>橋のまん中まで来ると、深い谷底から、</p> <p>「こらー！ わしの橋をだまって通るのは、誰だー！」</p> <p>と、いう声が出て、恐ろしい魔物が出てきました。</p> <p>「ぼくです。小さいヤギの、ガラガラドンです。山の向こうへ、草を食べにいくんです」</p> <p>「小さいヤギの、ガラガラドンだと？ だまってわしの橋を通ったからには、草なんか食べに行かれないぞ。おれさまがお前を、食べるんだからな！」</p> <p>「まっ、待ってください。ぼくはこんなに、小さいんです。後ろから、もっと大きいヤギが来ます。どうせ食べるんなら、大きいヤギの方がおいしいですよ」</p>	<p>音楽表現①</p> <p>音楽表現②</p> <p>音楽表現③</p> <p>音楽表現④</p> <p>音楽表現②</p>	<p>音楽表現①</p> <p>音楽表現②</p> <p>音楽表現③</p> <p>音楽表現④</p>	

<p>小さいヤギのガラガラドンは、小さい声で言いました。 「そうか、じゃあ、次に来るやつを待つとしよう。さっさと行っちゃまえ」</p>	音表現①	音表現①	音楽表現⑤
<p>やがて中くらいのヤギのガラガラドンが、ゴトゴト、ゴトゴト、橋を渡って来ます。 橋のまん中まで来ると、</p>	音表現②		
<p>「こらー！ だまってわしの橋を通るやつは、誰だー！」 と、魔物が出てきました。</p>		音楽表現③	
<p>「ぼくです。中くらいのヤギの、ガラガラドンです。山の向こうへ草を食べに行くんです」 「ざんねんだな、中くらいのヤギのガラガラドン。お前が草を食べる前に、わしがお前を食べるんだ」 魔物は、大きな口をパクッと開けました。</p>			音表現①
<p>「待ってください。ぼくのあとから、もっと大きいヤギがきます。どうせ食べるんなら、大きい方がおいしいですよ」 中くらいのヤギのガラガラドンが、中くらいの声で言いました。 「そうか、じゃあ、待ってるとしよう。さっさと、行っちゃまえ」</p>	音表現③	音表現②	音楽表現⑥
<p>やがて大きいヤギのガラガラドンが、 ドシドシ、ドシドシ、橋を渡って来ました。 「こらー！ だまってわしの橋を通るのは、誰だー！」 魔物が、出てきました。</p>	音表現④	音楽表現④	
<p>「ぼくだ。大きいヤギの、ガラガラドンだ」 「ようし、食べてやるから覚悟しろ」 魔物は大きな口を、パクッと開けました。</p>			音表現②
<p>「ふん、食べられるもんか！ ぼくは大きいヤギのガラガラドンで、立派なツノもはえてるし、強いツメも持ってるぞ。さあ来い！」</p>			

<p>大きいヤギのガラガラドンは、魔物に向かって突き進みました。 ドシーン！</p>	<p>音表現⑤</p>		<p>音表現③</p>
<p>キラキラ光る二本のツノが、魔物の目をさしました。</p>	<p>音表現⑥</p>		<p>音表現④</p>
<p>「ウギャー———！」</p>		<p>音表現③</p>	
<p>どんなに強い魔物でも、目をつぶされてはかきません。 大きいヤギのガラガラドンは、ゆうゆうと橋を渡りました。 こうして山の向こうの草原に着いた三匹のガラガラドンは、おいしい草をたくさん食べる事が出来ました。</p>	<p>音楽表現③</p>	<p>音楽表現⑤</p>	<p>音楽表現⑦</p>

1. グループA

グループAでは、音楽表現①として、登場人物(三匹のヤギ)の紹介と「草を食べに行く」という物語の場面説明の後に、歌・ピアノ・リトミックに木琴・鈴の演奏を独自に加え、「さんぽ」の替え歌が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

行こう 行こう 草を食べに行こう 草原めざして どんどん行こう
山道 がけ道 へっちゃらさ 3人いれば なにもこわくない
おれたちなかよし ガラガラドン

ここでは、山のむこうに草を食べに行くことを楽しみに出発した三匹のやぎのガラガラドンたちの仲の良さや楽しい心境をあらわす替え歌の歌詞の内容が、「さんぽ」という明るいマーチ調の作品選択と結びついて表現されている。

次に、音楽表現②として、深い谷底から魔物の恐ろしい声をする直前に、歌・ピアノ・リトミックに大だいこの演奏を独自に加え、「かいぶつだぞ」の替え歌(長調から短調に移調)が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

誰かが来—た— 誰かが来—た—
橋を渡—たら、食べちゃうぞ！ ウォー

ここでは、「こら—！わしの橋をだまって通るのは、誰だ—！」という、恐ろしい魔物の声のナレーションの直前に、「かいぶつだぞ」という魔物に直結している作品選択と「橋を渡—たら、食べちゃうぞ！ ウォー」という替え歌の歌詞の内容を通して、魔物の恐ろしさが表現された。

次に、音表現①として、小さいヤギのガラガラドンによる「次にもっと大きいヤギが来る」という説得を受け入れ、魔物が小さいヤギのガラガラドンを食べるのをやめ「次に来るやつを待つとしよう。さっさと行っちまえ」と言い放った後に、鉄琴による明るい音の表現が挿入された。

続いて、音表現②として、小さいヤギのガラガラドンの次にやってきた中くらいのヤギのガラガラドンが橋のまん中まで渡ってきたところで、大だいこによる低い音の表現が挿入された。

次に、音表現③として、中くらいのヤギのガラガラドンによる「次にもっと大きいヤギが来る」という説得を受け入れ、魔物が中くらいのヤギのガラガラドンを食べるのをやめ「そうか、じゃあ、待ってるでしょう。さっさと行っちまえ」と言い放った後に、鉄琴による明るい音の表現が再度挿入された。

続いて、音表現④として、中くらいのヤギのガラガラドンの次にやってきた大きいヤギのガラガラドンのナレーションが入ったところで、大だいこによる低い音の表現が再度挿入された。

次に、音表現⑤として、大きいヤギのガラガラドンが魔物に向かって突き進む「ドシーン！」というナレーションが入ったところで、大だいこの音が挿入された。

そこで、音表現⑥として、大きいヤギのガラガラドンの二本のツノが魔物の目をさしたところで、スレイベル→大だいこ・小だいこ・ギロ・タンバリンという、数種類の大きな音が挿入された。

ここでは、音表現が連続して①から⑥まで挿入され、音表現①③では、小さいヤギのガラガラドンと中くらいのヤギのガラガラドンが魔物に食べられることなく命拾いした心境をあらわす鉄琴の明るい音が挿入された。音表現②④では、中くらいのヤギのガラガラドンが橋のまん中まで渡ってきたところと大きいヤギのガラガラドンが橋を渡っているところで、魔物の声を予見させるような大だいこによる低い音が挿入された。ただし、大きいヤギのガラガラドンが橋を渡っているところでは、「ドシドシ、ドシドシ、橋を渡って来ました」というナレーションの前に大だいこの音が挿入されており、中くらいのヤギのガラガラドンでは橋のまん中まで渡っているところで挿入されていたのが、それより早いタイミングで音表現が入れられることで、聴き手の魔物への恐怖へのスリリングな効果がより高まったと考えられる。

音表現⑤では、大きいヤギのガラガラドンが魔物に向かって突き進む「ドシーン！」という物理的な表現としての大だいこの音の挿入、音表現⑥では、スレイベル→大だいこ・小だいこ・ギロ・タンバリンという、数種類の華やかな大きな音がコンビネーションで挿入されることで、大きいヤギのガラガラドンの二本のツノが魔物の目をさすという物語の中でも劇的な場面の演出効果に結びついたと考えられる。

すべてのナレーションが終了した後に、音楽表現③として、歌・ピアノ・リトミックに木琴を独自に加え、「てのひらをたいように」の替え歌が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

ガラガラドンはつよいんだ みんなそれぞれつよいんだ
ガラガラドンはつよいんだ みんなそれぞれつよいんだ

にほんのツノをたいように かざしてみれば
りっぱにかがやき トロルたおす ※トロルはDVD 視聴時の魔物の名称
ちいさくても ちゅうくらいでも おおきくても
みんなみんな ガラガラドンだ ともだちなんだ

ここでは、無事に魔物を退治した勝利感と、音楽劇の始めでも音楽表現されていた、三匹のやぎのガラガラドンたちの仲の良さを改めてあらわす替え歌の歌詞の内容が、「てのひらをたいように」という皆で生きていることを肯定する作品選択と結びついて表現された。

2. グループB

グループBでは、音楽表現①として、ナレーションの入る前に、テーマソングとして、歌・ピアノ・リトミックによる「線路はつづくよどこまでも」の替え歌が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

三匹のヤギのガラガラドン 草を食べたくて山に向かう
道の途中には危険がいっぱい おいしい草もとめ
ファイトだガラガラドン！ オー！！

ここでは、替え歌の歌詞の前半では、三匹のやぎのガラガラドンたちはまだ気づいていない山に向かう途中での危険を予見させる説明的な内容となっているが、替え歌の歌詞の後半では、第三者的立場から、三匹のやぎのガラガラドンたちを応援する内容と変化している。このように、替え歌がテーマソングとしてナレーションより先に挿入され、「線路はつづくよどこまでも」という旋律が前向きに進んでいく特徴を感じさせる作品選択と結びついて、物語のストーリーの予見や主人公側に味方した表現がなされているといえる。

次に、音楽表現②として、「こらー！わしの橋をだまって通るのは、誰だー！」と小さいヤギのガラガラドンに対して恐ろしい魔物が出てきたところで、歌・ピアノ・リトミックによる「かいぶつだぞ」（長調から短調に移調）の替え歌が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

とろーるだぞ とろーるだぞ
おいらがお前を食べてやる

ここでは、「こらー！わしの橋をだまって通るのは、誰だー！」というセリフの後に、恐ろしい魔物の声を説明するかのように「かいぶつだぞ」という魔物に直結している作品選択や「おいらがお前を食べてやる」という替え歌の歌詞の内容を通して、魔物の恐ろしさが表現された。

続いて、音楽表現①として、小さいヤギのガラガラドンによる「次にもっと大きいヤギが来る」と

いう説得を受け入れ、魔物が小さいヤギのガラガラドンを食べるのをやめ「次に来るやつを待つとしよう。さっさと行っちまえ」と言い放った後に、こわい音→チャラーンという音の順で、タンバリン・鉄琴による表現が挿入された。

ここでは、「こわい音」による魔物の恐ろしさと、「チャラーンという音」による小さいヤギのガラガラドンが命拾いし「さっさと行っちまえ」と魔物が捨てゼリフを放った場面での一瞬の緊張感と場面転換としてのメリハリが音表現された。

次に、音楽表現③として、中ぐらいのヤギのガラガラドンに対する「こらー！わしの橋をだまって通るのは、誰だー！」という、恐ろしい魔物の声の後に、音楽表現②と全く同じ歌・ピアノ・リトミックによる「かいぶつだぞ」の替え歌が挿入された。

ここでは、魔物が小さいヤギのガラガラドンに対した場面と全く同様に、「かいぶつだぞ」の替え歌を通して、恐ろしい魔物の声を説明するかのように入れ替え歌が挿入され、魔物の恐ろしさが表現された。

続いて、音表現②として、中ぐらいのヤギのガラガラドンによる「次にもっと大きいヤギが来る」という説得を受け入れ、魔物が中ぐらいのヤギのガラガラドンを食べるのをやめ「そうか、じゃあ、待ってるでしょう。さっさと行っちまえ」と言い放った後に、小たいこ・鉄琴・ギロ・ウッドブロックによる表現が挿入された。

ここでは、小さいヤギのガラガラドンに対してのときと同様に、中ぐらいのヤギのガラガラドンが命拾いし「さっさと行っちまえ」と魔物が捨てゼリフを放った場面での緊張感を表現しているが、小さいヤギのガラガラドンの次に、中ぐらいのヤギのガラガラドンも同じように魔物と対面して怖い目にあったことを強調するかのように入れ替え歌が挿入され、より危機感が迫る感じに音表現がなされた。

次に、音楽表現④として、中ぐらいのヤギのガラガラドンの次にやってきた大きいヤギのガラガラドンに対する「こらー！わしの橋をだまって通るのは、誰だー！」という、恐ろしい魔物の声の後に、音楽表現②③と全く同じ歌・ピアノ・リトミックによる「かいぶつだぞ」の替え歌が挿入された。

ここでは、魔物が小さいヤギと中ぐらいのヤギのガラガラドンに対した場面と全く同様に、「かいぶつだぞ」の替え歌を通して、恐ろしい魔物の声を説明するかのように入れ替え歌が挿入され、魔物の恐ろしさが表現された。

続いて、音表現③として、大きいヤギのガラガラドンがキラキラ光る二本のツノで魔物の目をさし、「ウギャー！」という魔物の叫び声のところで、大たいこ・マラカス・スズの表現が挿入された。

ここでは、魔物が大きいヤギのガラガラドンの二本のツノで目をさされ、魔物が退治されたという劇的な物語の場面と魔物の叫び声を描写する両方の側面から音表現が為された。

すべてのナレーションが終了した後に、音楽表現⑤として、テーマソングと全く同じである歌・ピアノ・リトミックによる「線路はつづくよどこまでも」の替え歌が挿入された。

ここでは、三匹のやぎのガラガラドンたちが魔物にやられることなく、無事に山で草を食べるこ

とができ、物語がハッピーエンドになったことを喜ぶかのように、音楽劇の始めにも挿入されていたテーマソングが、再び音楽表現された。

3. グループC

グループCでは、音楽表現①として、ナレーションの入る前に、テーマソングとして、歌・ピアノ・リトミックによる「てのひらをたいように」の替え歌が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

ぼくらはみんなガラガラドン 三匹仲良くくらしてる
ぼくらはみんなガラガラドン 草をさがして歩くんだ
山こえて岡こえて 歩いて行けば
そこにあるのは 宝の草
いつかきっと 小ヤギだって 大きくなる
だから僕ら 歩いていくのさ ガラガラドンドン

ここでは、替え歌の歌詞の内容から、三匹のヤギのガラガラドンたちが仲良く暮らし、小ヤギが大きくなるためにも草を探して歩くという三匹のヤギのガラガラドンたちの日常が描かれており、「てのひらをたいように」という皆で生きていることを肯定する作品選択と結びついて表現された。

次に、音楽表現②として、「三匹とも、ガラガラドンという名前だったのです」というナレーションの後に、歌・ピアノ・リトミックによる「さんぽ」の替え歌(最初の8小節のみ)が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

進もう 進もう うわさの谷へ
食べるの 大好き どんどんゆこう

ここでは、三匹のヤギのガラガラドンたちが食べるのが大好きで、草を求めてどんどん進んでいく楽しい情景が、「さんぽ」という明るいマーチ調の作品選択と結びついて表現されている。

続いて、音楽表現③として、「山の向こうの草はやわらかくておいしくて、食べたらきっと元気で丈夫(じょうぶ)になれるでしょう」というナレーションの後に、歌・ピアノ・リトミックによる「あわてんぼうのサンタクロース」の替え歌が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

うわさに聞いた おいしい草を ぼくら3匹で食べつくす
大きくなるぞ(小ヤギ) つーよくなるぞ(中ヤギ) 早く俺みたいになれよ(大ヤギ)
ガラガラドン ガラガラドン ガラガラドン

ここでは、三匹のヤギのガラガラドンたちがそれぞれ、おいしい草を食べて大きくなったり、強くなったりすることを願って歩いて行く姿が「あわてんぼうのサンタクロースという楽しい曲調の作品選択と結びついて表現されている。

次に、音楽表現④として、深い谷底から魔物の恐ろしい声をする直前に、歌・ピアノ・リトミックによる「おにのパンツ」の替え歌(最初の8小節のみ)が挿入された。替え歌の歌詞の内容は、以下の通りである。

ここにあるのはわしの橋 通るな～ 通るな～
通る奴らはわしが食う 怒るぞ～ 怒るぞ～

ここでは、「こらー！わしの橋をだまって通るのは、誰だー！」という、恐ろしい魔物の声のナレーションの直前に、「おにのパンツ」という魔物が余裕をもって明るく歌い上げるような曲調の作品選択と「ここにあるのはわしの橋 通るな～ 通るな～」「通る奴らはわしが食う 怒るぞ～ 怒るぞ～」という替え歌の歌詞の内容を通して、魔物の橋への独占欲や魔物の恐ろしさが表現された。

続いて、音楽表現⑤として、小さいヤギのガラガラドンによる「次にもっと大きいヤギが来る」という説得を受け入れ、魔物が小さいヤギのガラガラドンを食べるのをやめ「次に来るやつを待つとしよう。さっさと行っちまえ」と言い放った後に、音楽表現④と全く同じ歌・ピアノ・リトミックによる「おにのパンツ」の替え歌(最初の8小節のみ)が挿入された。

ここでは、音楽表現④と全く同じように「おにのパンツ」の作品選択と替え歌の歌詞の内容を通して、魔物の橋への独占欲や魔物の恐ろしさが表現された。

次に、音表現①として、中ぐらいのヤギのガラガラドンに対して「魔物は、大きな口をパクッと開けました」のナレーションの後に、大だいこ・小だいこ・タン布林・木琴・ギロ・ピアノの音による「迫ってくる感じ」で表現が為された。

ここでは、「大きな口をパクッと開けている」魔物が今にも飛びかかってくることを表すように、数種類以上の楽器音による直接的な効果音的表現が為された。

続いて、音楽表現⑥として、中ぐらいのヤギのガラガラドンによる「次にもっと大きいヤギが来る」という説得を受け入れ、魔物が中ぐらいのヤギのガラガラドンを食べるのをやめ「そうか、じゃあ、待ってるとしよう。さっさと行っちまえ」と言い放った後に、音楽表現④⑤と全く同じ歌・ピアノ・リトミックによる「おにのパンツ」の替え歌(最初の8小節のみ)が挿入された。

ここでは、音楽表現④⑤と全く同じように「おにのパンツ」の作品選択と替え歌の歌詞の内容を通して、魔物の橋への独占欲や魔物の恐ろしさが表現された。

次に、音表現②として、大きいヤギのガラガラドンに対して「魔物は、大きな口をパクッと開けました」のナレーションの後に、大だいこ・小だいこ・タン布林・木琴・ギロ・ピアノの音による「迫ってくる感じ」で表現が為された。

ここでは、音表現①と全く同じように「大きな口をパクッと開けている」魔物が今にも飛びかか

ってくることを表すように、数種類以上の楽器音による直接的な効果音的表現が為された。

続いて、音表現③として、大きいヤギのガラガラドンが魔物に向かって突き進む「ドシーン！」というナレーションが入ったところで、大だいこ・小だいこ・タン布林(2)・トライアングル・ピアノの音が挿入された。

ここでは、大きいヤギのガラガラドンが魔物に向かって突き進む「ドシーン！」という音が、大だいこ・小だいこ・タン布林(2)・トライアングル・ピアノと多種類の楽器音によって強調される表現がなされた。

次に、音表現④として、大きいヤギのガラガラドンの二本のツノが魔物の目をさしたところで、クラベスの音が挿入された。

ここでは、魔物が大きいヤギのガラガラドンの二本のツノで目をさされ、一瞬で退治されてしまったことを表すような音表現が為された。

すべてのナレーションが終了した後に、音楽表現⑦として、テーマソングと全く同じである歌・ピアノ・リトミックによる「てのひらをたいように」の替え歌が挿入された。

ここでは、三匹のやぎのガラガラドンたちが魔物にやられることなく、無事に山で草を食べる日常にもどることができたことを表すかのように、音楽劇の始めにも挿入されていたテーマソングが、再び音楽表現された。

III 分析結果

グループABCに共通して、音楽劇の場面の意味合いに応じて、同様の音楽表現や音表現が為される規則性がみられた。

音楽劇の前半から中盤では、主人公の心境や日常、ストーリーの予見や主人公側に味方した第三者的表現、魔物の独占欲や恐ろしさが、替え歌の歌詞の内容を通して、それらにふさわしい旋律としての作品選択に結びついて音楽表現された。

音楽劇の終盤では、主人公の魔物への勝利感、物語のハッピーエンド、主人公の日常への復帰を表すように、音楽劇の始めのテーマソングが再び音楽表現された。又、音楽劇の初めと最後で、主人公たちの仲の良さをあらわす替え歌の歌詞の内容が、皆で生きることを肯定する作品選択と結びついて表現された。

音表現では、魔物の恐ろしさと主人公が命拾いする一瞬の緊張感と場面転換のメリハリ、楽器数の増加による危機感、魔物の声の予見、同様の場面より早いタイミングでの音表現による魔物の恐怖へのスリリングさへの演出効果、数種類の音のコンビネーションによる劇的な場面や魔物の切迫への演出効果、魔物が一瞬で退治される表現が為された。

IV 今後の課題

今回の実践を通して、音楽劇のナレーション・セリフと併行して音楽表現・音表現がなされることで、物語の文脈では直接的に聴衆に知らされない主人公の心境、ストーリーの予見や生命観、物

語の劇的な場面やその転換、緊張感・危機感などが表現されていることがわかった。

このことから、幼稚園・保育所等の現場で音楽劇の実践が為されることで、乳幼児が言葉をよりイメージ豊かに理解することを助け、又、音楽に接する習慣がまだ長くはない乳幼児にとって、音楽表現や音表現という抽象的な媒体を物語の文脈における言葉と結びつけて経験することで、より豊かなイメージを伴った音楽理解へと結びつくのではないかと考えられる。

幼稚園・保育所等の現場において、どのように乳幼児のために音楽劇の実践ができるのか検証することが今後の課題である。

引用文献

- 1) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 『幼稚園教育要領』 『保育所保育指針<原本>』
(2016) (株)チャイルド本社 p.14, p.33
- 2) 同書 p.55
- 3) 同書 p.19, p.38, p.59
- 4) 同書 p.20, p.39, p.60
- 5) 同書 pp19 -pp.21
- 6) NHK エンタープライズ発行 DVD こどもにんぎょう劇場4 世界編より
- 7) 福娘童話集 きょうの世界昔話 12月15日より
<http://hukumusume.com/douwa/pc/world/12/15.htm>
- 8) 『こどものうた200』(2013) 小林美実 (株)チャイルド本社, 『子どもがときめく名曲&人気曲でリトミック』(2014) 井上明美 (株)自由現代社

Abstract

This study is a practice report about the relation between words and music expression in the activity of the making of music drama for students to be a childcare person, kindergarten teacher. Through the work choice appropriate song for contents of the text of the parody, it was expressed in music chief character side of the story every day , the expression of state of mind of the chief character, foreknowledge of the story, the third party who took sides with a chief character, terror and the triumph to the character who confronted the chief character , the happy ending of the story. The feeling of strain of instant in the story and shift of scenery, the stage effect in a dramatic scene were done through sound expression.